

大鏡の歴史性

— 道長の栄花の由来とその実体 —

増淵勝一

つめよ。日本国には唯一無二におはします。(290 P)

とか、

かやうな事ども聞き見たまふれど、猶この入道殿世にすぐれ抜けいでさせたまへり。天地にうけられさせたまへるは、この殿にこそおはします。(中略) かかれば、或は聖徳太子の生れたまへると申し、あるいは弘法大師の仏法興隆のためにうまれたまふとも申すめり。(中略) なほ権者にこそおはしますべかめれ……。 (293 P)

と絶賛するに至って、いよいよそのことが確信される。物語の途中で、

ただ今の入道殿下の御有様、いにしへを聞き、今を見はべるに、二もなく、亦三もなく、ならびなく、はかりなくおはします。(「後一条」紀聞語92 P)

とか、

その中に、おもふに、ただ今の入道殿よにすぐれさせたまへり。(同95 P)

とか、

又、入道殿下なほ勝れさせたまへる威のいみじきにはべるめり。

(「道隆」伝234 P)

『大鏡』は、早く大石千引翁が看破しておる如く、「御堂殿^{道長公の御}栄花の事をあげ」ていることは論を俟たない^{『大鏡短観』巻首}。開口一番、「序」で、

このただいまの入道殿下の御有様をも申しあはせばやと思ふ……。

(岡一男先生校注^{日本古典金書}『大鏡』昭和三十三年四月刊59 P。以下同。)

とか、

ただ今の入道殿下の御有様の、世にすぐれておはしますことを、道俗男女の御前にて申さむと思ふ……。その中にさひはひ人におはします、この御有様申さむと思ふ……。入道殿の御栄えを申さむと思ふ……。 (64～65 P)

と再三断わり書きをしていることが、何よりもこのことを証明するが、なお、「道長」伝では好意ある記述で多くの紙数をさき (251～278 P)、さらに、「藤原氏の物語」で、

ここのらの御中に、后三人並べずあて見奉らせたまふことは、入道殿より外に聞えさせたまはざんめり。(中略) さりや、聞し召しあ

等と記すことも再三である。「帝紀」や「大臣伝」における、「数多の帝・后、また大臣・公卿の御上をつづく」(「序」64P)のは、要するに道長の栄花のよるところを明らかにするための余教であつて、

帝王の御次第は申さでもありぬべけれど、入道殿下の御栄花も、何によりひらけたまふぞと思へば、先づ帝・后の御有様を申すべきなり。(「後一条」紀間語89P)

という理由により、あるいは、

世間の摂政・関白と申しし、大臣・公卿と聞ゆる、いにしへ今の、皆この入道殿の御有様のやうにこそおはしますらめとぞ、今やうの稚児どもは思ふらむかし。(「序」65P)

とか、

皆世はかかるなめりとぞ、人々おぼしめすとて、有様を少し又申すべきなり。(「道長」伝278P)

という危惧の念から、行なわれたのであつた。「帝紀」が思ひの外簡略であり、「大臣伝」の中でも、特に「道長」伝が長編であるのも、この著作方針に准じているわけである。また、記述としては、『大鏡』は、「序」「帝紀」「大臣伝」「道長」伝というような形をとつて、次第に道長の方に焦点が合はされる仕組みになっているが、その源流は、あくまでも道長の栄花を述べんとする作者の意図に基づいているわけで、そうした意図から逆に『大鏡』の輪郭が完成して行つたとしても過言ではないのである。

『大鏡』の本論は、「文徳」紀より起筆されたが、それは、道長の栄花をもたらしに至った北家^{藤原}中興の祖である冬嗣の女、順子の生み奉る

た帝が、文徳天皇であつたからであり、「大臣伝」の冒頭たる「冬嗣」伝との関連において結構されたのである。いうまでもなく、これは、藤原氏及び摂関政治の実態を把握しようとするには、最も適切なスタートである。^{坂本太郎博士「日本の歴史と文学」(昭和三十三年刊)七〇頁}「文徳」紀・「冬嗣」伝は、道長に直結する、表裏一体の源流なのである。叙述の終りを万寿二年^{二五〇}五月としたのも、七月になると赤斑瘡が流行し、道長の女寛子は七月に、嬉子は八月に共に亡くなつて、道長全盛の世に暗いかげがさして来るから、道長の栄花の絶頂を描くにあたつては、この設定が最適である^同。これは、先にも一部引用したが、「序」に、

いにしへ今の皆この入道殿の御有様のやうにこそおはすらめとぞ、今やうの稚児どもは思ふらむかし。されども、それさもあるぬことなり。言ひもていけば、同じ種一つすぢにぞおはしあれど、門わかれぬれば、人々の御心もちあも、又それに従ひて、ことごとになりぬ。(65P)

とあり、「後一条」紀間語の条に、

ただ今の入道殿下の御有様、いにしへを聞き、今を見はべるに、二もなく、亦三もなく……。 (92P)

とか、

流れを汲みて源を尋ねてこそは、よくはべるべきを……。 (95P)

とあり、「藤原氏の物語」に、

しかあれど、北家の裔、今に枝ひろごりたまへり。(中略)藤氏と申せば、ただ藤原をばさいふなりとぞ、人はおぼさるらむ。さはあれど、もとす多知ること、いとありがたきことなり。(282P)

とあるが如く、『大鏡』の作者は、常に「もとす多知ること」を重視して、時勢を發展的に捉えようとしていたことがわかるから、作者のそうした科学的歴史把握の方法があつてこそ、はじめて達成された首尾設定なのである。

『大鏡』の作者が、歴史の大勢の判断に過たなかったことは、また、『雑々物語』に、

かやうに物のはえうべしき事どもも、天曆の御時までなり。

冷泉院の御代になりてこそ、さはいへども、世は暮れふたがりたる心ちせしものかな。世のおとろふることも、その御時よりなり。

(319 P)

と、この世の衰微は冷泉院時代から始まるとしつつ、他方、「師輔」伝で、

その帝^{冷泉}の出でおはしましたればこそ、この藤氏の殿ばら今に栄えおはしませ。(168 P)

と看破していることによつても推察できよう。作者は、藤原氏の抬頭と皇室(この世)の衰微という現象を、相関的に捉えているのである。これは、考えようによつては、作者が道長の栄花の由来を説くことにすぐれていただけではなく、皇統本位に歴史を考えた場合にも、適切な通史を完成し得たであろうことを予想させるし、延いては、作者の歴史觀察の的確さを物語るものと思われる。

『大鏡』の作者が、描かんとした対象をまず決定し、次に、それに基づきつつ、かくも的確なる歴史把握をしたことは、まさに驚異である。

当時の『新国史』や、私撰史書の『本朝世紀』『日本紀略』第二部等は

もちろんのこと、『栄花物語』でさえ、「六国史」以後の官撰史書の欠けたのを補うという、書き継ぎ史的・記録的・「六国史」的性格を脱することのできなかつた中であつて、『大鏡』のみが、独自の史観から道長一人に焦点を合わせて、的確なる叙述範圍を決め、これが歴史を綴つたのである。『大鏡』以後に出た、『今鏡』『水鏡』『増鏡』等も、いずれも、書き継ぎ史的傾向を絶つことはできなかった。あるいは、本格的史書たる『愚管抄』や『神皇正統記』は、独自の史観を確立して主体性を持つてはいたが、とにもかくにも、神武天皇より説き起さなければならぬという、常套的起論方法を捨て去ることができなかつたのである。すなわち、『大鏡』の用いた歴史把握の方法が、いかに特色あるものか理解できるであらう。

『大鏡』の歴史性は、まず、書き継ぎ史的な性格を絶つて、独自の歴史的叙述対象を決定し、それが歴史を發生的に捉え、かつ、その起結を的確に定着するという、すぐれた歴史把握の方法に存するということができる。また、時折、歴史現象を相関的に捉えようとする気配の見られることも、同様に、この物語の歴史的な性格の存在をうかがわせるのである。

二

ところで、「入道殿下の御栄花も、何によりひらけたまふぞと思へば、先づ帝・後の御有様を申すべきなり」(「後一条」紀問語89 P)と言い切る作者の心中は、藤原氏の栄花が、何よりも、天皇家との密接な関係——いわゆる外戚関係——から生じているということを指摘しようとするに

他なるまい。橘清友の女、嘉智子腹の仁明天皇が、冬嗣の女順子を娶つて以来『本朝皇統』、藤原氏と皇室との外戚関係が確立した。「帝紀」を通じて、冒頭に天皇の母宮が明記され、「大臣伝」を通じて、大臣の女たちの名や活躍ぶりが述べられている所以もここにある。もちろん、彼女たちは当代一流の才女であり、高貴な身分の女性であつて、師尹の女、村上天皇女御芳子の、有名な『古今集』全巻暗誦の逸話が、半ば賛嘆的に描かれていたり（師尹」伝131P）、村上天皇中宮安子につき、

大方、殿上人・女房、さるまじき女官までも、さるべき折のとぶらひせさせたまひ、いかなる折も、必ず見すぐし聞き放たせたまはず、御覧じ入れてかへりみさせたまふ。まして御はらからたちをば、さらなりや。（中略）されば、うせおはしましたりし、ことわりとはいひながら、田舎世界までこそは聞きつぎ奉りて、惜しみ悲しび申ししか。（師輔」伝155P）

と記され、また太皇太后宮彰子が、治安元年二〇十月十四日の後一条天皇初度の春日行幸の際『日本』、

三笠山さしてぞきつるいそのかみふるきみゆきの跡を尋ねて
（『千載集』卷二十「神祇歌」（五三））

と詠じたのに対して、「これこそ、翁らが心及ばざるにや。あがりても、かばかりの秀歌えさぶらはじ。」（「道長」伝267P）と激賞されたりなどしている。したがって、よい意味での興味ある、すぐれた女性たちであつたからこそ、名前が列挙され、逸話が記されたのであり、道長の栄花の由来を述べるという『大鏡』の本筋が失われているというような解釈が成り立つかも知れない。しかし、本論冒頭の「文徳」紀から、順子や高子

と在原業平との恋愛事件が記され（67～68P、「陽成」紀70～71P）、済時の次女が「御心わざに」一緒になった帥の宮に捨てられ、「心えぬ有様の、ことの外なるにてこそおは」したと言われ（師尹」伝135P）、安子の十女、大斎院選子に「追従深き老いぎつねかな」という隆家の評言が付され（師輔」伝161P）、兼家女綏子が、あまりに従順なため、三条院から「あはれさ過ぎて、うとましくこそおぼえしか」と仰せられた由伝えられ（兼家」伝218P）、妍子の女房たちに批難があげせられたり（雑々物語」338・339P）、その他かなりの女性たちの早世のことなどが記述されているところなどをみると、『大鏡』の作者は、藤原氏関係の女性たちに対して、しばしば揶揄的で冷淡であり、賞賛一方から彼女たちを『大鏡』に登場させたのではないことがわかう。後述するが、『大鏡』で言う栄花とは、子孫の繁栄ということがひとつの大きな条件となっており、この實際を述べんがために、藤原氏累代の子女の盛衰を記しているのである。女性たちの至福は、入内して国母となることである。当然ながら、皇室との関連の上に、彼女たちの話が展開され、延いては、皇室と藤原氏との外戚関係のよるところがさらけ出されることになる。こうした論外と思われる如き女性説話も、世継の翁をして作者が、

その中にさいはひ人におはします、この（道長ノ）御有様申さむと思ふほどに、世の中の事のかくれなくあらはるべきなり。（序」64～65P）

と言わしめている如き、道長の栄花の由来を説くに際しての、補説なのである。

藤原氏北家繁栄の基礎を固めた冬嗣天長三（八）の功績は、彼が嵯峨天皇

の信任をえ、藏人頭となって政治の機密に参与し、弘仁元年（八一）九月の「薬子の乱」によって彼の対立者、式家の薬子・仲成を追放したことが、第一にあげられている。有本実氏「王朝政治の盛衰」『日本歴史』講座第二巻（昭和三十一年八月刊）けれども、『大鏡』にはそうした記述はなく、彼が文徳天皇の御おぼでであつたからこそ、「大臣伝」の先陣を承わつたのであるとされている（後一条紀間語 95 P）。

『大鏡』の作者が、藤原氏の栄花をもたらししたものとして、その外戚政策を重視していることが、このことによつてもわかるであろう。同じことは、冬嗣の子良房の場合にもあてはまる。彼は嵯峨上皇の崩後、承和九年（八四）七月に「承和の変」を起し、伴氏（大伴氏）や橘氏を政界から追放することに成功し、さらに、貞観八年（八六）九月には、応天門の怪火は伴大納言善男の放火によるものとして善男を流罪に処し、北家の勢力を確立したのである。上同ところが、『大鏡』「良房」伝には、このような記事は全く見られず、

ただし、この大臣は、文徳天皇の御をぢ、太皇太后明子の御父、清和天皇の御祖父にて、太政大臣・准三宮の位にのぼせたまふ。（中略）この殿ぞ、藤氏のはじめて太政大臣・摂政したまふ。めでたき御有様なり。（97 P）

とあつて、天皇家との姻戚関係と、それによつてもたらされた、自分の孫の九歳の清和天皇に代わつて、人臣にしてはじめて万機を摂行する摂政の地位についたことが記されているだけなのである。

さらに、良房の養子基経は、『大鏡』にあつては、繁樹がたからの君であり（「基経」伝 102 P）、

この大臣のさだめによりて、小松の帝光孝天皇は位に即かせたまへる

なり。帝の御末も遙かにつたはり、大臣の末も俱につたはりつつ後見申したまふ。さるべく契りおかせたまへる御中にや、とぞおぼえはべる。（同 100 P）

とあるなど、天皇の御後見として、いかにも理想的であつたかのように描かれている。しかし、事實は陽成天皇の摂政になつた上、天皇の廃立を断行し^{上同}、また、宇多天皇の御即位後には、阿衡の事件の如く、天皇に圧迫を加えたりなどして（北山茂久氏「日本の歴史」四、昭和四十年五月刊 二七六頁）、政権をほしいままにしたのである。

『大鏡』のこうした傾向は、「朱雀」紀に、

このみかど生れおはしまさずば、藤氏の栄え、いとかうしもおはしまさざらまし。（77 P。「雑々物語」307 Pにも見える。）

とか、「師輔」伝に、

その帝冷泉天皇の出でおはしましたればこそ、この藤氏の殿ばら、今に栄えおはしませ。（168 P）

とかあるように、作者が、常に藤原氏の繁栄のよりどころを、天皇と結び付けて判断していることによつても理解できよう。

『大鏡』においては、岡一男先生や松本治久氏が論考されているように、王威のいみじきことがしきりに説かれ、あるいは、「帝紀」と「大臣伝」が別にされ、君臣の名分もやかましく言われている。岡一男先生「大鏡」説・松本治久氏「大鏡の歴史観」『群見學園』国語科紀要十一（昭和三十八年三月刊）と同時に、既述の如く、皇室と藤原氏とを同一体とみなす傾向もあり、「藤原氏の物語」には、

（鎌足ノ）御子の右大臣不比等のおとど、実は天智天皇の御子なり。（281 P）

と、暗に藤原氏の皇裔たることをほのめかす一条もあるほどである。これは、一方では、清盛が後白河院の御落胤であるとか、秀吉が藤原氏の出身であるなどという風聞のよるところと軌を一にしてい、後一条朝、道長時代に遅れること約九十年の、鳥羽朝・院政時代に生きた『大鏡』の作者にとつて岡一男先生前掲
書解説二九頁、天皇の絶対的優位を信じつつも、前代

藤原氏の活躍は誠に驚愕に価するものであり、そうした事実を、単に藤原氏一族の累代の功業によるものだけとは信じきれなかった心情の赴かしめたところのものでもあらう。あるいは、岡一男先生が説かれた如く、この物語の主人公たる「大宅世継」という姓名には、御歴代の物語をする翁という意味のほかに、大御代の万歳を祝言する翁という意味もあり同解説、その「大宅氏」が仮名ではなく、実在していて、孝昭天皇から出たといわれるところをみると
角川源義氏『悲劇文学の
發生』昭和三十四年刊、「大鏡」の作者としては、天皇こそ万世一系であり、この世の万民が、結局は皇裔なのであり、藤原氏もその例に漏れぬということを言いたかったからかも知れぬ。が、他方、作者が、藤原氏の栄花のよって来るところを、何をおいても、その皇室との密接なる外戚関係にあるとしたかったためであり、道長の栄花も、まず、そうした先祖伝来の皇室との関係の積み重ねによっているということを看破していたからに違いないのである。

本論が終った後、さらに、「藤原氏の物語」で、たとえば、

一 贈太政大臣冬嗣のおとどは、太皇太后順子の御父、文徳天皇の御祖父。

一 太政大臣良房のおとどは、皇太后宮明子の御父、清和天皇の御祖父。

一 贈太政大臣良良のおとどは、皇太后高子の御父、陽成天皇の御祖父。(後略) (288~290 P)

の如く、北家出身の大臣と、その女及び孫にあたる天皇との関係が一覽されている。作者の眼が、藤原氏栄花の契機として、徹頭徹尾、その皇室との外戚関係に向けられていたことを知るべきである。

すなわち、『大鏡』のこうした歴史分析は、藤原氏の政策を、「外戚政策」とか「入内政策」などという言葉を用いて、積極的に検討を加えているわけではないが、そういう事実、作者が気付いていたことを、十分うかがわせるのである。少なくとも、そういう事実が看取されることだけは確かであらう。なるほど、現代史学の成果は、外戚政治の実態を精確かつ明快に解明しているではあるうけれど、その基礎資料ともいべきものが、この『大鏡』の記述なのである。『大鏡』の史料価値は、実に、この物語のこうした歴史分析の萌芽にあるとも言うことができるのであり、それが、『大鏡』の歴史的品格を形作っていることも、また、疑いない事実なのである。

三

藤原氏が皇室と外戚関係を結ぶのに積極的であったのは、いうまでもなく、摂政・関白という地位を獲得するためであった。自分の女を入内させ、その生んだ皇子を早く位につけ、その後見として政界に君臨するのである。藤原氏の権勢は皇室の外戚という私的な地位と、摂政・関白という公的な地位が一体化して成立したものと云われるが有本実氏、前掲論文、『大鏡』においても、とりわけ前者をその要因としていることは、前項に論

じた通りである。『大鏡』で言う栄花、ということのひとつは、子女が数多あって、それが高位顯官に就任しているということであるが、後、そうした考え方も、『大鏡』の作者の皇室と藤原氏との外戚関係に対する関心の深かさを参酌すれば自然のことである。子女が多いほど、そうした機会も多くなるわけである。

一方、摂関職について政権をとることによって、自分や一族の栄花がもたらされるという見方も、たとえば、道長の栄花のはじまりに関しては、

（長徳元年）五月一日に、宮中雜事まづ内覧の関白の宣旨承はり
たまうて、榮えそめたまひにしぞかし。（「道長」伝253P）

とあり、「安和の変」の条には、

そのゆゑは、式部卿の宮^{親王}帝にゐさせたまひなば、西の宮^{親王}殿^{明高}
の族に世の中うつりて、源氏の御榮えになりぬべければ、御をぢた
ちの魂ふかく非道に、御弟^{（円融天皇）}をば引き越し申させ奉らせたま
へるぞかし。（「師輔」伝156P）

とあるなど、『大鏡』にふれられていることは事実である。為光につき、
法住寺をぞ、いとかめしうおきてさせたまへる。摂政・関白せ
させたまはぬ人の御しわざにては、いと猛なりかし。（「為光」伝209
P）

と記されているのも、「摂政・関白をする位の者だったら、その力にまかせて作ることではできるだけだろうけれど」といった意味が暗にこめられていて、摂関職が栄花をもたらす契機であるという考えが前提になっていると言えよう。

しかし、「兼通」伝に見える、有名な兼通と兼家との骨肉相食む摂関職の争奪戦とか（193→194・204→206P）（東松本には言、該記事なし）純友が「関白にならむ」と「天慶の乱」を起したとかいう記述は（「道隆」伝242P）、どうも摂関の地位についたので一族が大いに榮えたとか、その地位を利用して権勢をほしいままにしたなどという書きぶりではないように思われる。それよりも、摂政・関白という地位に就任するということが重視されているらしいのである。摂関職につくことが目的で、争い、乱を起したのである。つまり、この場合『大鏡』の作者は、摂政・関白という地位を栄花の契機とするよりも、栄花そのものに他ならないという風な考え方をしているらしいのである。

こうした考え方は、たとえば、

（伊尹ハ、摂政太政）大臣になり榮えたまひて三年……。〔伊尹〕
伝170P）

とか、

（道隆ハ）関白になり榮えさせたまひて、六年ばかりやおはしけ
む……。〔道隆〕伝223P）

という記述についても言えることである。これは摂政・関白の地位が栄花の契機になったということではなくて、そういう地位についたことが栄花そのもので、その栄花の地位に何年間に在ったという意味なのである。あるいは、師輔が後の冷泉帝や円融帝の祖父であり、子孫が繁栄したにもかかわらず、摂政・関白をしおせなかつたのは口惜しいとされているのは（「師輔」伝166P）、やはり、摂関職につくということ自体が、半ば栄花に到達したことを意味し、栄花の一面が摂政・関白の地位であ

るということ物語っていよう。また、虚構ではあるが、岡田希雄氏「大鏡研究 昭和十一年四月号」、太政大臣頼忠が一条天皇の御即位に伴い、「よそ人にて関

白退かせた」もうて、女の遵子と「ひとつに住ませた」もうていたところ、時の摂政兼家の孫の隆家が、内裏に出仕するのに、猛り狂う馬にまがり、雑色二三十人ばかりに先払いさせ、遵子邸の方を流し目で見やりながら通り過ぎたが、頼忠は、

いと安からずおぼせども、いかがはせさせたまはむ。(中略) あさましく思せど、なかなかなる事なれば、こと多くものたまはで、

ただ、『なさけなげなる男にこそありけれ。』とばかりぞ申したまひける。(「頼忠」伝125～126 P)

状態であったとあるのなども、摂関の地位から退りぞけば、たとえ太政大臣の地位にあったとて、その凋落ははなはだしく、摂政・関白の地位こそ栄花そのものであるという、作者の見解を示している。つまり、『大鏡』においては、総じて、摂政・関白という地位を栄花の契機とするよりは、栄花そのものに他ならないという風な考え方が濃厚なのである。

摂政・関白という地位が、あらゆる権力を集中して、いわば権力の権化の如き実体であることは、単に天下執行の宣旨が下って次の関白就任がうわさされただけでも、世の人々が押しかけたという伊周の例によってもわかるが(「道隆」伝230 P・「道長」伝252 P)、それだからこそ、藤原氏なり道長なりの栄花がもたらされたと考えるのが、現代では常識になっている。『大鏡』の作者も、一見、この摂関職の実体を理解していたらしく、その一端は先述の如くうかがわれるが、前記諸例の検討によれば、圧倒的に摂関職を栄花そのものと見なす傾向が強く、その理解も

意識的なものであったとは思われない。あるいは、摂政・関白という地位が栄花をもたらし契機なればこそ、それを自明のこととして、栄花そのものとしてしまったのかも知れないが、それにしても、道長の栄花の由来を徹底的に究明しようとする作者の態度と相入れぬものを感じる。結局のところ、作者は、やはり、摂政・関白という地位を栄花そのものと見ていたのであって、それを藤原氏の栄花のよって来るところとまでは気付きもしていなかったし、吟味もしていなかったというのが真相であろう。

ところで、「大臣伝」の冒頭には、たとえば、

(基経へ)公卿にて廿七年、大臣の位にて二十年、世をしらせたまふこと十余年かとぞおぼえはべる。(「基経」伝99 P)

とか、

(実頼へ)大臣の位にて二十七年、天下執行、摂政・関白したまひて、二十年ばかりやおはしましけむ。(「実頼」伝118 P)

とか、

(道兼へ)大臣の位にて五年、関白と申して七日ぞおはしまししかし。(「道兼」伝245 P)

の如く、公卿・大臣・摂政・関白等の在位年数が表現されている。従来『大鏡』におけるこうした年数の表示には殆ど関心が示されていないが、私見によれば、これこそ、各大臣の栄花の実情を集約して記したものとと思われる。何故に作者は、「大臣伝」の冒頭に、いちいちその在位年数をかかげなければならなかったのか。何故に作者は、

今の世となりては、一の人の、貞信公、小野宮殿をはなち奉りて

は、十年とおはする事の、近くはべらねば、この入道殿も、いかがと思ひ申しはべりしに、いとどかかる連におされて……。〔道長〕
伝²⁷⁸P)

と、その摂関職の在位年数にこだわらなくてはならなかったのか。すべて、これ、そうした高位顯官そのものが栄花であり、その度合は、その年数によって決するという、作者の考え方の至らしめたところなのである。無意味な数字の羅列ではないのである。これは、この物語にいう栄花の性格を必然的に規定して来るが、こうした事例から推しても、摂政・関白という地位を、栄花の契機とするよりも、到達した栄花という風に解していることが考えられるのである。

『大鏡』の作者のこうした見解は、たとえば、この物語にいう栄花の別の具体例である、子女が数多あつて、それが高位顯官についているという考え方からもうかがわれるように、^後いわば『大鏡』全編に流れる史観とも言うべきものである。そうした史観は、何に由来するかというに、藤原氏北家流の繁栄という歴史的事実の觀察にあることはむろんだが、前項で論じた如き、栄花の契機をさぐるに際しての、皇室との外戚関係の重視ということにあることも確かである。先程、摂関職を栄花の契機とする気配の見えている例として、『安和の変』の条をあげたが、これなども、見方によっては、皇室との外戚関係をより重視した書きぶりであるといえよう。つまり、『大鏡』の作者が藤原氏の栄花の原因を、何よりもその皇室との外戚関係にあるとして、その影響を摂政・関白という地位よりも上位に置いたということが、必然的に摂関職を栄花そのものという風に把握させ、その契機たるゆえんの吟味をもせず終

ってしまったのではないかと思われるのである。これはいうなれば『大鏡』の歴史吟味の偏向であつて、決してこの物語の史書としての価値を傷つけるものではないが、その歴史吟味には、おのずと限界のあることが理解されるのである。

四

藤原氏が天皇と外戚関係を形成し、摂政・関白あるいは太政大臣等の地位について政治を独占しようとするにあたり、何よりも障害となつたのは、自分たちとほぼ同等の地位や条件を持った他氏の存在と、外戚関係にない皇子の即位ということであろう。そういう障害を排除しなければ、自家の栄花はもとより、自分の栄花さえこころもとなないのである。

藤原氏は、諸家の中でも、このことを最も早く痛感し、最も強力にこれが排除策を押し進めたのである。まず、良房は、『大鏡』には述べられていないが、『承和の変』^{承和九}（八四二）を起して、伴（大伴）氏や橘氏を政界から追放し^{前説}、さらに、『清和』紀にふれられている「惟喬の親王の東宮あらそひ」^{前説}（68P）において、良相と共謀して、紀名虎女腹の惟喬親王を退け、嘉祥三年^{八五}十一月、生誕わずか九カ月の明子腹の惟仁親王^{清和天皇}を立坊させた^{『大鏡裏』書に参照}。「藤原氏の物語」に、中臣鎌足が「藤原」の姓を賜つた際、紀の氏の人々が、「藤かかりぬる木は枯れぬるものなり、今ぞ紀の氏はうせなむずる」と言つたとあるが（283P）、いみじくも、これが実現したわけである。その後、惟喬親王の立坊を推挙した左大臣源信を貶しめようとしたが果さず、自分たちと共謀した大納言伴善男を流罪に処してお茶を濁した^{『大鏡』裏書}。

次に、良房の養子の基経は、陽成天皇の摂政となったが、入内させる娘を持たなかったために、天皇の改廃を断行し、従兄弟にあたる光孝天皇を立てた。その強引さは、

陽成院おりさせたまふべき陣の定にさぶらはせたまひ、融のおとど、左大臣にてやむごとなくて、位につかせたまはむ御心深くて、

「いかがは。近き皇胤をたづねば、融らもはべるは。」といひ出でたまへるを、この大臣こそ、「皇胤なれど、姓たまはりて、ただ人にてつかへて位につきたるためしやある。」と申し出でたまへれ。

〔基経〕伝100P〕

という具合である。一見、融は帝位をうかがう野心家の如く描かれているが、これは、基経の剛腹さを強調しようとする作者の趣向が赴かしめたとところで、実際には、彼が自家のためにならない融の念願を封じ込んだのである。陽成院の御退位を、彼の息のかかった陣の定で議決している位である。このことによって基経は、光孝天皇在世中、権威をふるうことができ、宇多天皇が即位されると、さんざんてこずらせた挙句阿衡の事件、関白に就任して執政した公卿の補任。

基経の長男の時平もまた自家勢力の伸張を志したが、源融の薨去と宇多天皇の御譲位を待って、遂に、

左大臣時平は御年もわかく、才もことのほかに劣りたまへるによりて、右大臣真道の御おぼえことのほかにおはしましたるに、左大臣安からず思したる程に、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ためによからぬ事出でて……。〔時平〕伝103P〕

という、菅原道真左遷事件をひき起し、ここに、藤原氏北家に対する

有力な政敵は、殆ど一掃されてしまった。わずかに、南家武智暦の後裔である元方が、女が村上天皇の第一皇子広平親王を生み奉ったので、それを期待したが、時平の甥、師輔の女である安子も、すぐさま皇子天皇を生み申したので天曆四、北家の勢力は微塵も傷つかなかった〔師輔〕伝165、166P〕。そのため、時平のもう一人の甥にあたる実頼が、冷泉天皇の病弱なることを理由にして関白になってから後は、摂関職は常置のものとなり、藤原氏北家一族のみがこれに就任することになった有本実氏治の盛衰。たまたまこれに逆らうような現象が予見される場合には、たとえば、源高明の左遷事件の如く安和二、師尹を主に〔師尹〕伝130P〕、その甥の伊尹・兼通・兼家の兄弟が共謀して事にあたり〔師輔〕伝156、157P〕、藤原氏北家のお家安泰を図ったのである。

ところが、こうして他氏を排斥して天皇との外戚関係を確立し、摂関職を独占してみると、今度は、これをめぐって摂関家内部に対立が持ち上ったのである。いうまでもなく摂政・関白の地位は権力をほしいままにできたからである。まず、基経の曾孫である兼通と兼家とが、兄伊尹の残した摂関の地位を争ったが、安子の円融天皇へ宛てた、「関白をば次第のままにせさせたまへ。ゆめゆめ違へさせたまふな。」という遺言状によって、権中納言兼通が大納言兼家をおさえて関白になった〔兼通〕伝194P〕東松本には告。得意満面の兼通は、兼家側室の道綱母に恋文を送る始末である「續後日記」天延二年。二人の対立はますます激しくなった。兼道が病いで死の近いのを知り、兼家が早々に内裏へ出向いて次の関白の地位をねらうと、兼通は重病をおして急拠参内し、従兄弟の頼忠を関白とした〔兼通〕伝204、206P〕東松本には告。さらに同日兼家の右近大將按察使の

位をとり、治部卿に下げてしまった（「兼通」伝203P）。兼家は円融・花山の両朝にわたって不遇な時代を過すが、女の詮子を円融天皇に奉ったところ、その生んだ孫王天皇一条が立坊したので、なんとかこれを早く即位させたいと念ずる。そこで三男の道兼と共謀して、有名な花山院出家事件を成功させる。兼家は、

もしさる事やしたまふと、あやふさにさるべくおとなしき人々、何がしかがしといふいみじき源氏の武者達をこそ、御送に添へられたりけれ。京のほどは隠れて、堤のわたりよりぞうち出でまゐりける。寺などにては、若しおして人などやし奉るとて、一尺ばかりの刀どもを抜きかけてぞ守り申しけるとぞ。（「花山」紀83〜84P）
という用意周到さだった。

兼家が一条天皇の摂政のまま薨すると（正暦元（990））、その地位を長男の道隆がおそったが、その後で、三男の道兼との間に、かつての兼家と兼通との抗争が再現した。道隆は就任五年目にして死に臨み、道兼に位を譲るまいとして、重病をおして参内し、「おのれかくまかりにてむほど、この内大臣伊周のおとどに百官並に天下執行の宣旨たまふべき」由奏上し許される（「道隆」伝230P）。しかし一週間後には「長者印」が道兼に渡り（「公卿補任」）、ひと月経たぬうちに道隆が薨してしまうと、関白の詔は伊周でなく道兼に下った。伊周は「手にすゑたる鷹をとらいたらむやうにて歎」いた（「道隆」伝230P）。が、皮肉にも、関白になった道兼も旬日にして病死するに至る（同上・「道長」伝252P）。伊周は、一条天皇が妹の定子を寵愛されているのを頼みにして、今度こそはと大いに就任運動をしたが、兼家の四男の道長も天皇の母後の詮子を通じて猛烈な売込みをはか

ったため、三日後には、道長が「宮中雜事まづ内覧の関白の宣旨」を承るに至った（「道長」伝253P）。詮子は伊周の至らぬことと兄たちが撰関職についていながら弟の道長にやらせぬのは不憫だとの泣き落し一点張りで、一条天皇にぶつかったのであって、

その日は、入道殿は、上の御局に候はせたまふ。いと久しく（詮子）出でさせたまはねば、御胸つぶれさせたまひけるほどに、とばかりありて、戸をおしあけて出でさせたまへりける。御顔は赤み濡れつやめかせたまひながら、御口は心よく笑ませたまひて、「あはや、宣旨下りぬ。」とこそ申したまひけれ。（「道長」伝277〜278P）

という情況であった。道長はつづいて一カ月余り後の、長徳元年五九九六月には、内大臣に任ぜられ、氏長者ともなった（「道長」伝253P・「公卿補任」）。伊周は翌年、自分の愛人に花山院が通つておられると邪推して、弟の隆家に謀って、その部下をして花山院に威嚇射ちを致し申し上げるという、いわゆる「花山院不敬事件」を起す（「道隆」伝230P）。それがもとで伊周兄弟は流罪に処せられることになったが、これは道長が仕組んだものである。道長が後にわざわざ隆家に語った、

ひととせの事は、おのれ道長が申し行ふとぞ、世の中にいひはべりける。そこ隆家にもしかぞおぼしけむ。されど、さもなかりし事なり。宣旨ならぬこと、一言にても加へてはべらまいかば、この御社にかくて詣りなましや。天道も見たまふらむ。（「道隆」伝238P）

という言葉が、このことを推測させよう。宣旨ならぬことは一言も加えていないというが、その宣旨を当時十七歳の一条天皇に下されるよう示唆申し上げたのが道長だったのである。

道長は、かくして、その地位を不動のものにしたが、深謀遠慮の彼は、後一条天皇の御即位に伴って就いた摂政を頼通に譲った後も（寛仁元年、〇一七）、

自家につながらない東宮敦明親王（小一条院）の退位を示唆し、彰子腹の敦良親王（後朱雀天皇）の立坊に成功した（「師尹」伝135-148 P.）。この小一条院東宮退

位事件は、一方では小一条院の外戚筋にあたる小一条（師尹）流の通任等の進出に対処し、他方、小一条院の義父にあたる兼通の長男顕光の進出を恐れて仕組まれたものと思われる。主謀者はもちろん道長であるが、「道

兼」伝に「左衛門ノ督（兼）、小一条院すかしおろし奉りたまへり」（249 P.）

とあるように、道長の次男兼隆が実際の事にあたったのであり、道長は花山院事件の如く、表立たないで暗躍する狡猾さだった。道長は小一条院を御退位奉った後に、院の希望された高松殿腹の御匣殿（子寛）を奉ったから、顕光の女延子は顧みられなくなり、顕光は前途の希望も失せて、寛仁三年（一〇）に憤死してしまった（「兼通」伝198-199 P.）。

道長の代に至るまでの、こうした政争はまことに目にあまるものがあり、特に兼家時代以降に展開された骨肉相食む摂関家内の抗争は言語道断というより他ないが、摂政・関白の地位についてのみ、彼等の権勢を発揮できる時代にあつては、自然、こうならざるを得なかったのである。天皇との外戚関係は摂関の地位を招来し、それが栄花をもたらしのである。彼等は、そうした外戚関係の形成と摂政・関白の地位の獲得のために、さらにそれらを維持するために、どうしても彼等の政敵を追いつ落さなければならなかったのである。

『大鏡』は列伝体風に構成されているから、こうした政争史も断片的に描出されているが、それだけに事件の裏面を各方面からあばいてお

り、藤原氏繁栄の直接の原動力が、実にそうした政争の勝利にあることを看破しているのである。平安朝の主要な政争がほとんど網羅されていることによって、作者の主意が藤原氏及び道長の栄花のよって来るところの分析にあることがわかるであろう。決して興味本位的な従題ではないのである。これらの記述が、『大鏡』の史料価値を高めているという事実は言わずもがなである。『大鏡』が、時に、平安朝の裏面史と言われるゆえんが、ここにもあるのである。

五（一）

藤原氏の栄花の原因として、天皇との外戚関係や峻烈なる政争での勝利等をあげるのは、現代でこそ常識になっているが、道長の没後百年足らずして、このことを認識するに至った、『大鏡』の作者の炯眼は驚異に価しよう。道長の栄花を藤原氏累代の栄花への努力がもたらしたという強力な認識。これこそが、『大鏡』を書き継ぎ、史的傾向から脱却せしめた主因なのである。と同時に、作者は、さらに、道長の栄花の由来に道長自身の同様の努力があつたことを指摘し、一段と、その栄花の原因究明に焦点を合わせることが忘れなかった。

「道長」伝によれば、道長の栄花をもたらし直接の原因は、

- (1) 好運であつたこと（長徳元年（五九）、道長三十歳の時に疫病が流行し、道隆・道兼をはじめとして、大臣・公卿七、八人が、二、三ヶ月のうちに死んでしまった。そのため、道長の敵が極めて少なくなつた（252 P.）。

- (2) 最大の競争者であるはずの伊周が、賢明な人物でなかつたこと

(伊周はわずか二十二歳の若さであり、「瓜をこはば、うつはものをまうけよ」という諺が引かれるほど「御心もちあめさかさしくおはしまさ」なかったから、到底、天下をおさめ得る器ではなかった(252 P)。

(3) 詮子の力添えにより、「宮中雑事まづ内覧の関白の宣旨」を承わったこと(253・277・278 P)。

(4) 道長自身がすぐれた人物であったこと(政治的な才幹はもちろん拔群であったが、詩歌の才に卓絶し(266・267 P)、剛気の持主であり(269・271・274・276 P)、才気煥発であった(273 P)。

等であるという。これらの記述も、あげられていることは、それぞれ一理があり、作者の歴史分析の巧緻さと適切なことをうかがわせるに十分であろう。

こうしてもたらされた、道長の「御有様、いにしへを聞き、今を見はべるに、二もなく亦三もなく、ならびなく、はかりなくおはします」

(「後一条」紀間語92 P) 栄花の実体とは、一体、いかなるものであったか。① 第一に、道長は、万寿二年^{二五〇}現在六十歳、内覧関白・撰

政・太政大臣等を歴任したが、「一の人」で「十年とおはする事」は、

貞信公^{平忠}と小野宮殿^{頼実}を除いては、道長だけであり(「道長」伝278 P)。

② その後、寛仁二年^{一九〇}三月に出家入道したが(同263 P)。

なほ又おなじき(寛仁二年)五月八日、准三宮の位にならせたま

ひて、年官・年爵えさせたまふ。(同265 P)

という栄えある身分である。関白頼道も道長の御前では跪くし(「藤原氏の物語」300 P)、内大臣教通に至っては、道長は「近くてえ見奉りたまは

ぬ」ほどで(「道長」伝269 P)、依然実力ナンバー・ワンである。

③ 次に、道長の二人の北の方、倫子と明子との生んだ子女十二人は、すべて健在で、高位顯官に就任して活躍していた。なかなずく、倫子腹の女四人と男二人の繁栄ぶりははなはだしく、「道長」伝によれば、次のような状況である。

彰子^{三十} 故一条院中宮。今の帝^{後一条天皇}・東宮^{後朱雀天皇}の御母后。「太

皇太后宮」。(253・254 P)

妍子^{三十} 故三条院中宮。禎子内親王^{後朱雀天皇}の御母后。「皇太后宮」。

(254 P)

威子^{七十} 今の帝の中宮。「今の中宮」。(254 P)

嬉子^{十九} 東宮の女御。(後冷泉天皇)懷妊中。(255 P)

頼通^{四十} 今の関白左大臣。「宇治殿」。(255 P)

教通^{三十} 今の内大臣兼左大将。「二条殿」。(255・256 P)

また、明子腹の女二人と男四人も、

寛子^{二十} 今の小一条院^{教明親王}の女御。(258 P)

尊子 三位ノ中将源師房の北の方。(258 P)

頼宗^{三十} (権) 大納言・東宮ノ大夫。(258 P)

能信^{三十} (権) 大納言・中宮ノ権ノ大夫。(258・259 P)

長家^{二十} (権) 中納言。(259 P)

顯信^{三十} 元右馬頭。出家入道。(259 P)

という繁栄ぶりである。しかも、彼等は、「男も女も、御官位こそ心に任せたまへらめ、御心ばへ・人がらどもさへ、いささかかたほにて、もどかれさせたまふべきもおはしますさず。とりどりに有識に、めでたくお

はしまさふ」ていたから、「ただことごとならず、入道殿の御さいはひのいふかぎりなくおはしますなめり」〔道長〕伝²⁶³ P〕というのであった。すなわち、道長は「帝・東宮の御父、三后・関白左大臣・内大臣・あまたの納言の御父」であるが、特に「大臣の御女三人、后にてさしならべ奉りたまふこと」は「おほかた又世になき事」であって〔同²⁶⁵ P〕、

この入道殿下の御ひとつの門よりこそ太皇太后宮、皇太后宮、中宮、三所出でおはしたれば、まことに希有々々の御さいはいなり。

〔同²⁶⁶ P〕

なのであり、「日本国には唯一無二におはします」のである。〔藤原氏の物語〕²⁹⁰ P〕

④ 道長の二人の北の方、倫子と明子とは、いずれも「源氏」であるが、それぞれ「北の政所」、「高松殿」と評判された。殊に倫子は、「ただ人と申せど、帝・東宮の御祖母にて、准三宮の御位にて、千戸の御封えさせたまふ。年官・年爵たまはらせた」もうたから〔道長〕伝²⁵⁶ P〕、

世の中には、いにしへ、ただ今の国王、大臣、皆藤氏にてこそおはしますに、この北の政所ぞ源氏にて、御幸極めさせたまひにたる。

〔同²⁵⁷ P〕

という状態であった。

⑤ 「春日行幸」〔同²⁶⁶ P〕、「上巳の祓」〔同²⁷⁶ P〕、「大御堂の供養」

〔藤原氏の物語〕²⁹⁶ ~ ³⁰⁸ P〕、「法性寺五大堂供養」〔雑々物語〕³²⁶ P〕、「中宮彰子大原野行啓」〔同³²⁸ P〕等、華麗なる行事がしばしば催され、たと

えば、「大御堂の供養」の状況を見る者は、道心などかえって吹っ飛んで、「いとしもこの世の榮花の御さかえのみおぼえて、染着の心いとど

ますますにおこ」る有様であった。⑥ そうした際、道長は詩歌の道

にすぐれておったから、一層「ことのはえ」があった〔道長〕伝²⁶⁶ ~ ²⁶⁸ P〕。⑦ 道長の建立した法成寺（無量寿院）は、他のいかなる寺にもまさってめでたくすぐれ、あたかも「極楽浄土のこの世にあらはれるよと見え」るのだった〔藤原氏の物語〕²⁹⁰ ~ ²⁹¹ P〕。⑧ したがって、

この世も楽しいこと限りなく、租税や労役も軽くなり、「かばかり安穩泰平なる時にはあひなむやと思」われるほどだし〔同²⁹³ ~ ²⁹⁴ P〕、⑨ 飯・酒など不足の時には「入道殿の御前に申文を奉」ればよいし〔同²⁹⁵ P〕、

⑩ 盗人などもいず、人々は、「かくてたのしき彌勒の世にこそあひてはべ」ったのである〔同²⁹⁴ P〕。

すなわち、『大鏡』の作者の言う道長の榮花とは、道長自身が高位顯官へ就任し歴任したこと及び妻子女が健在で優秀であり、高位顯官に就任しておること、また、当代の華麗な行事の連続、あるいは、御堂のすばらしさ、そして、世の中の安定等であることがわらう。それは、寛仁二年（一〇一〇）十月の、後一条天皇女御威子の立后の日、後小野宮右大臣実資に向って、前太政大臣・入道殿道長が誇らかに詠みかけた、

此世平は我世と所思望月乃虧たる事も無と思へば〔小右記〕同年十月

十六日条

という歌の趣きと、まさに同じではないか。はたまた、皮肉たつぷりと実資に、「今見世間形勢、万事惣帰於（道長）一家、向後事弥千倍歟」と言われ〔同記寛和四年十月十一日条〕、半ば感嘆のおももちで、

土御門寝殿以一間（注略）配諸受領（注略）令營云々、未聞之事也、（中略）当時大閤徳如帝王、世之興亡只在我心、与呉王其志相

同、(同記寛仁二年六月廿日条)

と記されている状況と、いみじくも一致しているではないか。『大鏡』の作者が再三強調する、道長の栄花の世にすぐれ、はかりなきことは、史実に照らし合わせても、まず、疑問の余地がないように思われるのである。

ところが、道長時代に租税や労役が軽減されたり、盗人などがいなくなったなどということは殆ど考えられない。〔法善之助博士「日本文化史」II「平安時代」(昭和三十四年刊)一六二—一五頁参照。〕また、道長の詩歌の才が公任以下の文人・歌人のそれに比較して、言われるほど卓越していたとも思われない。〔拾遺集二首・後拾遺集五首以下勅撰集・集歌は計四十首に近い。〕子孫の繁栄という点では、師輔などの如く、五人の太政大臣(伊尹・兼通・兼家・為光・公季)と冷泉院・円融院両帝の母后、村上天皇中宮安子、及びはじめ重明親王室で、後に村上天皇尚侍となった登子、また、高明室となつた三の君と五の君〔説〕、さらに冷泉院の東宮時代に入内した愍子等々を子に持つて、道長の子女の繁栄にも匹敵すると思われるものもある。「師輔」伝。あるいは、本人自身の栄達という点では、基経の如く、「公卿にて廿七年、大臣の位にて二十年、世をしらせたまふこと十余年」に及び「基経」伝99P)、道長のそれにも劣らぬ例もある。

したがって、『大鏡』の描き出した、道長の栄花の世にすぐれ、はかりないという実体は、多少の割引をして受取る必要があるはずである。いささかほめすぎのきらいがなくもなく、正面切つて、道長の栄花の、「いにしへを聞き、今を見はべるに、二もなく、亦三もなく、ならびなく、はかりなくおはします」(「後一条」紀間語92P)点を指摘してほしいと言われても、総合的な卓越性は別として、どれといつて即答できぬの

が実情なのである。

五 (二)

それでは、何故に、こうした道長の栄花が、「いにしへを聞き、今を見はべるに、二もなく、亦三もなく、ならびなく、はかりなくおはします」と言えるのであろうか。『大鏡』で言う「栄花」とは、基本的には「忠平」伝の冒頭部に(115P)、まず忠平の栄えある官位昇進の状況を記し、次に孫王(朱雀院・村上天皇)と子女(実頼・師輔・師氏・師尹・安子)との繁栄ぶりを叙して、「いみじかりし御栄花ぞかし」とあるのによつてもわかる通り、①本人の栄花と、②子孫の繁栄とが合同された上に形成されている。①②はさらに、前述の道長の栄花の例が示すように、(1)当人がすぐれた性格・才能の持主であり、(2)長命(健在)で、(3)高位頭官に(4)長く就任しているということが、それぞれ骨子となっている。したがって、この①②いずれかが欠けても、真の栄花とは言えないわけであるが、さらに、その骨子たる(1)から(4)までの条件が、本人の栄花の場合であろうと、子孫の場合であろうと、ひとつ欠けていても、作者の言う栄花には程遠いのである。

たとえば、為光は、「大臣の位にて七年、法住時の大臣と聞えさ」し、五十一歳で薨じ、「いとやんごとなくおはしまし」て、本人の栄花の条件はほぼ整っている。しかし、長男の誠信は、「三十八にて悪心起しうせた」し、道信は「いみじき和歌の上手にて、心にくき人にいはれたまひしほどに、うせたま」うたし、三女は尼であり、四女は「入道殿〔道〕の俗におはしましし折の御子うみて、うせたまひ」、他は微位浅官の地位に甘

んじているという有様で、「御裔ほそ」いのである（「為光」伝206～209 P）。したがって、為光の栄花は真の栄花とは言えず、道長の栄花の足下にも及ばないわけである。また、さきほどの師輔は、なるほど、「東宮冷泉天皇、又四為平五円融の宮」が御孫であり、男君「十一人の御中に、五人は太政大臣にな」り、残りの者も出世し、村上天皇女御安子をはじめとする五六人の女たちがあつて、子孫の繁栄は「あさましうおどろおどろしき御さいはひなりかし」ではある。師輔自身も、「いとただ人にはおはしなさぬにや。思しめしによる行末の事なども、かなはなくぞおはししける」という申し分ない人柄・身分である。しかし、いかんせん、「摂政・関白えしおはしませずな」ってしまったのが「口をしかりけること」なのであり、彼の栄花も道長のそれには、やはり及ばないのである（「師輔」伝）。

兼家は、いわゆる「三道」（兼家）伝223 P）をはじめとして、「三条女院子詮、贈皇后宮子超の御父」であり、「一条院・三条院の御祖父」であつて、子孫の繁栄が強調されてもよさそうなのであるが、国章女腹の三条院尚侍綏子は、源宰相頼定と密通したというし（同218～219 P）、孫の帥宮は「少し軽々にぞおはしまし」たし（220 P）、ほか腹の四男道義は「世のしれものにて、まじらひもせでやみた」もうたというわけで（同223 P）、あまり好意的には描かれていない。兼家自身も、「公卿にて二十年、大臣の位にて十二年、摂政にて五年、太政大臣にて二年世をしらせたまふ、榮えて五年ぞおはします」という繁栄ぶりであるが、僭上な身持故に、「久しうは保たせたまはぬとも、定め申すめりき」とあつて、道長の栄花に到底及び難いということになっている。

道長の兄の道隆と道兼とは、特に子孫の衰微という点で、道長の栄花に全く及ばない。まず、道隆の場合、一条天皇中宮定子はまずまずとして、その長女は入道しており、次女は九才で亡くなり、男親王敦康親王も二十歳で亡くなつてしまった。また、定子の妹中君は「廿二三ばかりにてうせさせた」もうたし、三の御方は、はじめ帥宮を聲にし申したけれど、「後にはやがて御中絶えにしかば、末の世は、一条わたりに、いとあやしくておはすると聞えた」もうた由である。四の君も「はかなく亡せたまひ」、対の御方腹の女君は三条帝皇太后宮妍子の侍女である。さらに長男の道頼、六郎君は、父の薨後「うち続きうせた」もうてしまつたし、定子とひとつ腹の男君円隆も「三十六にてうせたまひ」、伊周・隆家は非運をかこつたし、他の兄弟たちはあるいは出家し、あるいは浅官に甘んじ、あるいは短命であつたという（「道隆」伝223～245 P）。道兼の場合、幼なかつた福足君が「いとあさましう、まさなう、悪しくぞおは」したし、次男の兼隆は、父道兼の花山院退位策略に重ねて、「小一条院すかしおろし奉りた」もうたために、「帝・東宮の御あたり近づかでありぬべき族といふ事」になつてしまひ、卑官であり、とぼちちりを受けた三男の兼綱は、藏人頭をやめさせられた。長女の遵子は一条院の女御を経て、通任の北の方になつて亡くなり、むかひ腹の女は一条帝中宮威子に仕え、その他は「女子をほしがり、願をたてたまうしかど、御顔だにえ見奉りたまはずなりき」という有様である（「道兼」伝）。いずれにしても、道長の栄花の比ではないのである。

さかのぼつて、良相の栄花などにしても、「御女子の御事よく知らず」「をの子は、……いと浅くやみたまひにき」と記されていて（「良相」伝

98 P)、満足なものとは言えない。また、時平などに至っては、取り柄は、左大臣になって、世の政を行なったことぐらいで、「才もことのほかに劣りた」もうていたし、三十九歳で早世し、「むすめの女御子孫もうせたまふ、御孫の東宮王も、一男八条の大將保忠卿もうせたまひにきかし」という有様で、わずかに顯忠のみが右大臣にまでなったが、つましやかで有名だったし、「これより外の君たち、皆三十余、四十に過ぎたまは」なかったという〔時平〕伝。

時平と同様の書きぶりが師尹であって、彼の栄花も、「大臣の位にて三年」とあるだけのわびしさ。しかも、「左大臣にうつりたまふ事、西ノ宮殿筑紫へ下りたまふ御かはりなり」と補注まで付されている。事件後、「その年もすぐさうせた」もうてしまった。女の村上天皇女御芳子はよいが、その出生の八宮が「御心極めたるしれもの」である。芳子の兄の済時は、「父おとどよりも、御さまわづらはしく、くせぐせしきおぼえまさりて、名聞などぞおはせし」という人柄。済時の女三条院皇后宮臈子は好意的に描かれているが、次女は「いと甚だしき心うき御有様にておはすめれ」という具合である〔師尹〕伝。

以上、栄花の必要十分条件のいずれか一方あるいは両方共を欠いている者をあげて来たが、道長と同様に、①②の条件をほぼ備えていると思われるのが、基経・忠平・実頼の三人である。

基経は、①摂政・関白を歴任。「公卿にて廿七年、大臣の位にて二十年、世をしらせたまふこと十余年」に及び、光孝帝のすぐれていらっしやることを発見して、御即位させ申し上げた。②朱雀院・村上兩天皇の御祖父で、いわゆる「三平」〔基経〕伝102 P)の父であり、三郎の兼平

の君のみが從三位宮内卿で亡くなった〔基経〕伝。

忠平も、①摂政・関白を歴任。「公卿にて四十二年、大臣の位にて三十二年、世をしらせたまふ事廿年」に及んだ。②御子五人のうち、実頼（小野宮殿）・師輔（九条殿）・師氏・師尹（小一条殿）の四人はいずれも卓絶した人物で、出世し、「その君達、左右の大臣、納言などにて続きおはしまし」て、藤原氏の繁栄をもたらした。女君一所は先坊文彦の御息所である〔忠平〕伝。

実頼は、①「大臣の位にて二十七年、天下執行、摂政・関白したまひて、二十年ばかり」には及んだらしく、「和歌の道にも勝れ」「おほよそ何事にも有識に、御心うるはし」かった。②長男敦敏の男佐理は、「御心ばえぞ、懈怠者、少しは如泥人とも聞えつくくおは」したけれど、「世の手かきの上手」であり、その佐理の女實頼は、父に劣らぬ「女手かき」であり、佐理の妹は為光の北の方である。三男の齊敏の男実資は、「今の小野ノ宮の右大臣と申して、いとやむごとなくおはす」という〔実頼〕伝。また、二男は頼忠で、「大臣の位にて十九年、関白にて九年、この生きはめさせたまへる人」であったという〔頼忠〕伝124 P)。

すなわち、これら三人は、『大鏡』という栄花の必要十分条件を、ほぼ備えていることが判明しよう。『大鏡』の作者が、基経を繁樹のたから平忠の君とし〔基経〕伝102 P)、道長に加えて、「今の世となりては、一人の貞信公平忠、小野宮殿頼忠をはなち奉りては、十年とおはする事の、近くはべら」ぬ由強調しているのも〔道長〕伝278 P)、彼等が、自分自身栄花に到達したばかりでなく、その子孫も繁栄に至って、真の栄花を獲得したことを痛感していたからであろう。したがって、こうしたことで

は、道長の栄花は、「今を見はべ」った場合には当てはまらうとも、決して、「いにしへを聞き（はべるに）、……二もなく、亦三もなく、ならびなく、はかりなくおはします」とは断言できないのである。

そこで、道長の栄花を、真に卓絶させて、他の藤原氏累代の栄花と相違せしめているものは何かというに、第一に、道長が三后の父であるということであろう。これこそ、「まことに希有々々の御さいはひ」なのであり、「日本国には唯一無二におはします」のである。第二に、道長の建立した法成寺が、他のいかなる寺よりもめでたくすぐれてまさっているということであろう。天皇のお作りになった東大寺も、基経の大臣の極楽寺も、忠平の大臣の法性寺も、この御堂の有様にも、到底ならぶことができなかった。「極楽浄土のこの世にあらはれけるよと見えた」ほどなのである。

五 (三)

『大鏡』が言わんとしていた、道長の栄花の世にすぐれて、はかりないという実体は、結局のところ、「三后の父」と「法成寺」ということであつた。これは、前者は、道長の政治・社会面におけるはかりなき栄花の象徴であり、後者は、経済・文化面での道長の至福の象徴であつて、『大鏡』の作者は、いみじくも、彼の栄花の、前代未聞たる所以の核心をついたということができよう。「三后の父」と「法成寺」という二語のうちに、はかり知れぬ、つかみどころのない、道長の栄花の実体を集約したのである。そこに、作者の歴史事象の的確なる把握力を認むべきである。

しかしながら、それだけに、具体的な個々の分析がおざりにされ、存外抽象的であり、総じて、道長の栄花の卓越せることを、表面的に、詞をもつて強調していることも確かである。これは、いささか史書『大鏡』にとつて悲しむべきことではある。『大鏡』の作者は、全体を把握して、「三后の父」「法成寺」という二語のうちに道長の世になき栄花を象徴したが、たとえば、道長の栄花を支えた経済面の分析が十分にはなされていないというように、栄花の個々の構成分子を具体的にあげて、その前代未聞たる所以を強調することができなかった。分析することができぬほど、道長の栄花は、はかり知れなかったのかも知れない。けれども、やはり、これは、『大鏡』の歴史分析の限界を示すものとして頭に入れておかななくてはならないであろう。

考えてみると、藤原氏累代が、それぞれの伝において、何らかの形で、その栄花に難癖を付けられ、特に道長の兄弟の失態が鮮明に描き出されていながら、道長に対する批判は「道長」伝には見えず『大鏡』作者の道長への肯定的ないし同情的態度の分析は、松本治久氏「大鏡の構成」、昭和四十四年九月刊「一四四一五」頁に詳しい。、他の条に出て来ることが多く、

また、「実頼」伝におけるが如く、実頼二男の関白太政大臣頼忠については、一言もふれないで、実頼の子孫の繁栄を故意に黙殺するというような作爲があるのも、一方から言うと、すべて道長の栄花の世にすぐれ、はかりないことを強調するための手法であつたとも思われるのである。つまり、道長のたとえようもない栄花の個々の分析ができていないから、道長以外の者を比較的冷遇し、道長を賞讃することによって、道長の栄花のすばらしさを浮彫りにすることができたとも言えるのである。試みに、道長以外の、冬嗣・基経・忠平・実頼・師輔・兼家等々、

いずれを取ってみても、傑出した人物であり、剛氣というか、根性というか、すさまじいばかりのエネルギーの持主であり、すぐれた人物であることは疑いないのである。道長は、恐らく、そういう人物たちより、さらにすぐれていたであろう。しかし、『大鏡』の作者は、その卓越さの実体を、多くは、ありきたりの例でしか指摘することができなかった。その結果が、彼を表面的な感嘆詞でつつむことになったのである。

○ かかれば、或いは聖徳太子の生れたまへると申し、あるいは弘法大師の弘法興隆のためにうまれたまふとも申すめり。げにそれは、翁らがさかな目にも、ただ人とは見えさせたまはざめり。なほ権者にこそおはしますべかれ、となむ仰ぎ見奉る。〔藤原氏の物語〕293 P)

○ 天皇の御祖父にて、うちそひ仕うまつらせたまふ殿の、御有様、御かたちなど、少し世のつねにもおはしますましかば、飽かぬことにや。そこら集りたる田舎世界の民百姓、これこそはたしかに見奉りけめ。ただ転輪聖王などは、かくやと、光るやうにおはしますに……。〔道長〕伝 266～267 P)

○ 大方この二所道長倫子ながらさるべき権者にこそおはしますめれ。
(同 257 P)

○ 第一の相には虎子如渡深山峯なるを申したるにいささかも違はせたまはねば、かく申しはべるなり。このたとひは、虎の子のけはしき山の峰をわたるが如しと申すなり。御かたちようていは、ただ毘沙門のいきはひ見奉らむやうにおはします。御相かくの如

しといへば、誰よりも勝れたまへり。(同 272 P)

「聖徳太子」「弘法大師」「権者」「転輪聖王」「毘沙門」等々、いずれも道長が尋常ならざる人物であることを言っている。一見、前代未聞の栄花をもたらした人物であるから、こうした人物ないしは神仏の権化なのであるという風な書きぶりであるが、はかり知れぬ栄花の実体の分析が極められていないからかえって、こうした彼への賛辞が、栄花のすばらしさを外面から持ち上げる結果になっている。これらの表現によって、分析の不足がカムフラージュされ、道長の栄花の世に類いない様が表出されているのである。

また、これらの叙述は、道長が、神仏の権化などであったからこそ、はかり知れぬ彼の栄花がもたらされたのであるという風にも解釈できる。これは、道長の栄花の由来を、藤原氏累代の功業と、彼自身の功業とで理由付けようとした作者にしては少しく解せない態度である。すなわち、『大鏡』には、発生的に、相関的に歴史を把握しようとする傾向と、個人的な非科学的な理由によって、これを捉えようとする態度とが混在していることが予見されるのである。このことも、史書『大鏡』の歴史把握の限界として、銘記されるべきである。

そうは言っても、もちろん、これらの欠陥の存在は、当時の史書たる『大鏡』としては、当然のことであり、『大鏡』の史観の特色でもあって、『大鏡』の歴史性を著しく低下させるものではない。ただ、史書『大鏡』にも、おのずと、その歴史把握、分析共に、限界があり、したがって、その歴史性にも限界のあることを指摘したかったのである。

六

以上、『大鏡』の主題たる、道長の栄花の由来とその実体との叙述状況を概観しつつ、『大鏡』の歴史的性格というものを検討して来た。その結果、(1)『大鏡』の作者は、好主題の設定の上に、その歴史を發生的に捉えており、(2)かつその把握が実到的確であり、分析もかなり行なっている。(3)したがって、『大鏡』に歴史性の存在することはそうした作者の著作方針や歴史把握の方法からうかがうことができるばかりでなく、叙述選択が適切で史料的に価値のあることから確認できる。(4)しかし、歴史の大勢を把握する確さにひきかえ、その内面の具体的な分析ということになると、いささか曖昧なところが存在している。特に、『小右記』に指摘するような任官の専横や莊園の総取等の実情究明には物足らぬものを感じる。(5)また、歴史を相関的に見ようとする一方、個人的な、非科学的な理由によって、これを捉えようとする傾向が予見される。したがって、『大鏡』の歴史性も絶対的なものではなく、そこには、おのずと限界のあることが理解される、等々のことが判明した。

すなわち、多少の曖昧さはあるにしても、歴史を説くという著作目的、およびその分析・把握の方法、またその叙述等の存在こそ、『大鏡』の歴史的性格を特色付けるものであり、したがって、『大鏡』に歴史性が存在していることも、また確かなのである。